
Baby! Baby! Baby!

東野咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B a b y ! B a b y ! B a b y !

【Nコード】

N 4 5 7 5 Q

【作者名】

東野咲希

【あらすじ】

立ち往生とおきまりの事件少しの苦さ、チョコにはあと何が必要？
そんなことをいいながらも新志です。

b a b y! (前書き)

新志です。

b a b y!

「む．．．ん」

となりで呻きが聞こえた。

怠い体をひねる元気はこのひとに搾り取られてしまい動けない。
声だけをкаろうじて出す。

「お風呂入らないの？」

「えー．．．寒いから出たくない」

すねたような、かすれ気味の半音低いような声。

「おまえと一緒に入ってくれるなら今すぐにでも
私を干からびさせる気？」

前に、同じ誘いをかけられ面倒だからいっぺんに済ませた方がいかとのこのこついていったら、ベッドの上と変わらない行為がなし崩しに始まってしまった。次の日床から起き上がれないほどに身体を酷使させられた。もうあんなことにはなりたくもないしさせるつもりもない。

口を尖らせる。

「干からびはしれないと思うけど、むしろ若返るんじゃない？」

「変な論議を起こさないでちょうだい。疲れるのよ」

「そりゃあんだけ乱れればな」

さっきほどではないにしても、情欲に濡れた表情でこちらを見つめた。

私は目を閉じる。

彼の言葉には身体を持って覚えがある。羞恥で悦びを感じるほど淫らな女ではないはずなのに。

「あれだけしてまだ足りないのはあなたのほうじゃないの」
「悪い？」

肩を抱き込まれ、少し汗ばんだしなやかな体が密着する。
視線が絡まり、軽く唇にキスされる。

軀の芯から熱が帯びていき、解放したくてたまらない欲情を誘う。

それでも彼に腕を回したら負けだと思っている。

いまさら勝ち負けなんて気にしてもどうしようもないと、頭では分かっているけれど。

こうして求められるようになったのはいつからだか覚えていない。

高校生の時のある種でのピュアさは成人してそうも経たない程から心ゆくまで色褪せ、片っ端から女を誑かしていくような性癖を持ち合わせるようになった。それでいてアイドルの人気も集めている

はずの新一の名が週刊誌にキャッチされたことは皆無に等しい。

緩急が激しい愛撫を受けながら志保は、私も落とされたひとりなのだろうか、抱かれるたびに考える。

認めたくなかった。

いつでも彼とは対等だと思っていたし、それは事実だと信じて疑わなかったのに、これでは自分ばかりが新一のことを追い求めているのではないだろうか、と心許なくなる。

（私を抱いておいてほかの女の子とも遊んでるなんて、相当の罰当たりものよ？）

心の中で問いかけてみても気づいてくれるはずがない。

気づかなくていいところで気づくのが新一だし、そもそも気づいて欲しくない気持ちも強い。

新一のことで頭がのぼせている自分も、嫌いだ。

がちやりとドアが開く。感じ慣れない寒さに布団に潜り込む。白シャツとスラックスで彼が入ってきた。

今日は何の日か知っているか、と問いかけてきた。
思い当たる月日を返すと、もったいぶるように彼が付け加えた。

「バレンタインだよ、バレンタイン」
「バレンタイン？」

首を傾げる。

「なにか欲しいの？」
「宮野の手料理食べたいな」
「食べてるじゃない」

いつも博士と夕食を済ませてから帰りが遅い新一の家に食事を作りに行っている。
甘いわね、私も。

「ホワイトデーには30倍ね。変なことでお返しはだめよ」
「ばれたか」
「あたりまえでしょ」

閉じられたカーテンからは、針のように朝の光が差ししていた。
狂っていた時間感覚が取り戻されていく。

新一は穏やかに微笑んでいて、志保もゆっくりと微笑んだ。



「博士、いまからじゃちょっと遅いけど」

橙色の毛糸帽子をリボンで結んだ物を博士に手渡した。
編んだ帽子は結構高い毛糸を使った物だから、肌触りはなかなかいい筈だ。

博士はにこにこしながら室内だと言うのに頭にかぶせている。ついふと笑ってしまった。

「そういえば志保君」

「何？」

「新一君にはなにかしないのかね？」

「工藤君に？」

帽子を結んでいたリボンをいじる手が少し反応する。自分でも分からないけれど動揺はしているのだろう。

「あのひと、毎年山になるほどいろんなものもらってくるでしょう。モノが増えるだけで負担だわ」

「志保君にももらえるということが嬉しいんじゃないかのう」

「そうかしら。いつもご飯作って洗濯物して掃除して捜査に引っ張り出されて、あげる義理なんかないわ」

本気で言った。

「そうじゃな。いつも志保君を放っておくような男にはやれん」
「何馬鹿いってるの」

新一は上京してきたいつもの関西組と飲みに行ったらしい、昼間から。

和葉さんも相変わらず西の名探偵さんにぞっこん状態ではあったけれど、強い意志を持つ女に成長したようだ。ちなみにポニーテールにリボンは未だに変わらないトレードマーク。

行き詰まっていた研究がすらすらと呆気なく終結した志保は空しさで暇に弄ばれていた。

外に出ると冬の冷たい空気が、ストーブで血が上った頬に心地よかった。

ふと空を見上げると、キリスト絵画のように雲の海と化していて、少し感傷にも襲われる。

そのまま視線をずらすと、工藤邸があった。
そしてまたそらすと、道路が見える。

道路？

そう、いつも通りの道路である。

コンクリートで、あちこちつぎはぎだらけで、吐き捨てたガムが黒くこびりついていたりする、あまり綺麗ではないそれでも愛すべき道だ。

なにか違和感を感じ、それは工藤邸によせて置かれた段ボール箱のせいだと思い至った。

ゴミにしては不自然すぎる。

ファンの女の子が心を込めて作った本命チョコならば、あんなふうに無造作に放置しておくはずもない。

そろそろと近寄ると、まったく想像もしていなかったものがぱたぱたと身じろぎしていた。

もちろん我が眼球を疑ったのは言うまでも無い。

パステルカラーの肌着を着て毛布にくるまれ、頬を上気させているふっくらとした赤ん坊が丸く黒目が勝る無垢な瞳でこちらを見つめてくる。母性という名の感情のうねりに取り込まれそうになり、慌てて首を振った。

『あなたの赤ちゃんです。』

縦長で細々とした筆記体に、意識せずともため息が出た。

また事件を呼び寄せてきた、こんどは赤ん坊をも巻き込んで。

抱えたまま突っ立っていると、火をつけたように泣き出した。

段ボールから出して抱いてやると、涙のあとを残したまま安心してように指をしゃぶり始める。

「よしよし、」

とりあえず今は、最低限のベビー用品をそろえることが先決だ。

b a b y! (後書き)

バレンタインまでの短期連載で、何話かで終わる予定です。少し乙女気味な志保さんもまた可愛いもんじゃありませんか。↑
タイトルはAKB48の配信限定シングルからだったりします。あと赤ちゃんにかけて。

こんなあとがきまで読んでくださったあなたは相当の変わり者です。

b a b y ! b a b y !

粉ミルクの缶を見ながら作った人肌ほどの温度のミルク。

ちゅぽちゅぽと瓶を抱えて飲む姿は、なるほどこれが母性愛かとうなずきたくなるような庇護欲を十分にかきたてる。

空になった瓶を洗い、抱きかかえてげっぷをさせようと背中をさすっていると、人間がふたり入ってきた。

「ほら、パパが帰ってきましたよ」

丸く弾んだ感触の赤ん坊の腕をちよこちよこと新一の方にふらせると、口をとがらせて不服そうに呟いた。

「パパじゃねーよ」

「あら、さんざん女の子と夜遊びして、身に覚えがないなんてことないでしょうに。ねえ」

「工藤、一概においてった奴だけ責められるんはあらへんで」

「誰の子だよ」

「覚えてないの。それとも顔覚えてないほどののか、誰でも妊娠できるような環境だったのか・・・」

「なんで俺の子供ってことになるんだよ？」

「それがいちばん可能性としては高いと思うのだけれど」

重いため息をついたのは新一だけである。

それに、と志保はのぞき込む。不思議そうに口を丸める赤ん坊。

「とても似ているわ。瞳の色だとか、知識でつかちそうな顔立ちとか」

「工藤がちいさなってたときによう似とるわ」

つつん、と平次が黒い指でほったをつつくと、また泣き出す。あらあらと赤ん坊の顔が胸の方へくるようにすると、風船がしぼむようにやんだ。

その様子を新一は軽く睨みつけながら、文句をつける。言い訳とも聞こえる。

「確かに遊んでるかもしれないけど、節操もなく襲ったりなんかしないから。するとしてもちゃんと嗜みは欠かさないから」

「ほんとう？」

「ほんとう」

自分のときは真逆の新一の言う対応に志保は疑いのまなざしをむける。平次はまあまあと仲介を試みたが、それでもこの状況でクロとみなされるのは間違いなく新一だ。

平次も新一を全面的に信じることは残念ながらできなかった。

「体の大きさや首が据わってるところからみて、2、3ヶ月ってところね。体にハンディキャップもなし、いたって健康。さっきおむつを替えてみたら、女の子だったわ」

「心当たり、ないんか？」

「最低一年はたってるんだよな。確かそこらへんは、服部とイギリスでヤマにあたってたような気がするんだけど」

新一が平次を見やる。肯定の頷き。

「工藤は事件を据え置いて女とどうにかなるような器用なまねはできひん奴や。なあ姉ちゃん」

「工藤君にとっては事件のほうがご馳走だものね」
「ほっとけ」

とんとん、と一定のリズムで背中をたたき続けていると、ごごふっ

と喉になる。

げっぷが済んだかと重ねた毛布の上に寝かせてやる。何を勘違いしたのかきゅっきゅと笑い出した。

博士が子供のメカニズムを生かしたのだとかいって開発したところどころ穴が開いたボールのおもちゃを転がすとそれを小さい指で弄び始める。

「工藤君の理性を信じるとしたら、あなたの熱狂的ファンだとかの一凶行（、）だったりあなたが恨みを持った人物が腹いせしようとしてるのかもね。拾ったのが私でよかったわね」

「でもまずは誰の赤ん坊なのか」

「未歩!!」

ドアが大きな音をたてて開いた。

侵入してきた人物は、一目散に赤ん坊の方へ駆け寄り奪い取り抱きしめ、おうおうと獣のように泣き出す。

革ジャンを羽織ったがたいのいい男で、たしかに男臭さはあるものの新一によく似た顔立ちをしていた。

「未歩、ごめん、あんな女に預けた俺がバカだった、」

新しく舞い込んできた厄介ごとに、やれやれと肩を落とした志保だった。

b a b y! b a b y! (後書き)

とんとん事を運ぶこと。志保さん視点っていうかふつうの地の文です。

工藤はやり方はある意味服部氏よりもイヤラシイ気がします。でもちゃんと大人の配慮は忘れないと。

お読みくださりありがとうございました。

baby!baby!baby!

「じゃあこの子は、望月さんのお子さんなんですね」

「そうです」

きっぱりと断言した男の太い腕には赤ん坊――未歩と呼ばれていた――が抱きかかえられていた。輝くような笑顔が眩しい。さつき新一や平次に見せた

警戒の色はかけらもなく、未歩にとって見ず知らずの男というわけではなさそうだ。

涙が乾いて黒ずんでしまった顔を見かねて蒸したタオルを望月に渡すと豪快にござしと擦り始めた。

なにを生業としているのか、いやに筋肉質でがたいのいい体格をしている。聡明な顔立ちがその人物を気持ちよい男だと理解させるような役目も果たしているだろう

「ありがとうございます」

「いえ。よかったらおむつとかほ乳瓶とか、持って行きますか」

「おっ、有り難い。頂戴しておきます。いやね、男だけだとういうもんを使ったらいいのか分かんないですよね」

志保が万一に買いだめたベビー用品を袋に詰めるため奥へ消え、参りましたよと望月は頭を掻いた。

「まさかな、あの工藤新一の家だとは思わず・・・しかもそこに西の服部平次もいるんだから驚きましたよ。すいません、せっかくの休日」

「いえ、お子さんが無事で良かった」

「胸ン中じゃ工藤も、この赤ん坊の親やなかったことが分かって安心しとんのやから」

きょろりと人懐っこそうな丸い目を服部に向ける。ずっと視線で腰掛ける全身を撫でた。

「このひとって女に締まりがないんですか」

「孫を前にした爺婆の財布の紐より緩いんは確かやな」

「でもそれにしては浮いた噂を聞いたことが、あまりありませんが」

「後始末は巧妙」

「探偵だけあって？」

「せや」

「大変ですねえ。あの女の方も、気が気じゃいられないでしょう」

「それよりも」

ばつが悪そうな新一が話を切り替える。

「さっき、あんな女に預けた俺が悪かっただとか男だけだとか、おっしゃりましたけど」

「やっぱり気になりますか、探偵として」

望月が興味津々といった様子で身を乗り出す。

さっきの取り乱しぶりが嘘のような余裕綽々という態度に、新一は少し疑問を感じながらも問いかける。

「いえ、でも段ボールに置き去りにされていたなんて普通じゃないですから」

「ああ。たぶん、麻里子がやったんだと思います。どうしてかは、わからないんですが・・・」

望月は麻里子という幼なじみの女性と内縁関係を持っていたことがある。

未歩が生まれて間もない頃に麻里子とは別れ、未歩は引き取って貰ったのであるが麻里子はどうしようもない不精者であることを心配し、ここ数日麻里子を尾行していたら麻里子が未歩を入れた段ボールをここ工藤家に放置してどこかへ去ってしまったのだという。

「あいつ学生時代は陸上の選抜選手だったらしくて・・・追いか

けても無駄でしたね」

そう言ってふっと目を閉じる望月を横目で観察する。

何かがおかしい。

そうたとえば、確かに自分の目で未歩を放置していったのを見たはずなのに「麻里子がやったんだと思う」という曖昧な予測のよう
な言い方だとか、そんな
些細なもの。だがしかし、小さい矛盾が外壁を剥がすきっかけと
なることを新一はよく知っていた。

ちらりと戻ってきた志保に視線を送ると、気怠そうな瞳が見返して
きた。そしてちらりと望月の方に顎をやって、判別しかねる角度
で首を傾げる。

志保も？

もやもやするような違和感は、望月が未歩を連れて夜道に消えた
ときになってもまだ拭い去れなかった。

なあ、とはんぱ独り言のように呟くと、ん、と喉の奥で返事をされる。志保はクロスワードパズルなんてものに勤しんでいた。

新一は無責任にゆりかご椅子に体重をかけた。なめらかに後ろへ反る。たまごの様だ。

「おかしいと思わねえか」

「・・・幼なじみで学生時代陸上選抜選手だったことを『らしい』と表現するのだとか？」

「そうそ。でもだからって危険な人物だとは思わないけど、なーんか引つかかるんだよねー」

「あら、あなたは覚えてるの？そういうこと」

からかいの味を含んだ志保の綺麗な瞳が細くなる。

「まあ小学校低学年とかは記憶が曖昧だけど、結構覚えてるもんだよ。毎回学級委員に推薦されてたこととか、いつもプールのビ―サン忘れて上履き履いてたとか」

「・・・そう」

「なに、妬いた？」

「そんなわけないでしょ」

そう答えてくれることも想定済みなので、ただ意味深な含み笑いだけ残しておく。

志保は、嘘をつくとき額に手をやることが多い。必ず、じゃないかもしれないけど結構な頻度で。

今もたつぷりと縁取る睫を隠すように腕を乗せている。

ちよつとの嘘ならついていて。

俺が嘘を暴くことが大好きだって、彼女は誰よりも知っているはずだから。

「今やってるクロスワード、懐かしき夏の思い出ってやつなの。

ビーサンってビーチサンダルの略なのね。これ当たればミルキークイーン五キロなんだから、毎晩ごっそり消費するあなたと博士には協力して貰わないと」

三日後、再訪問者が現れた。

b a b y ! b a b y ! b a b y ! (後書き)

四ヶ月ぶり。東野を吊して潰して投げて踏んでいいです。むしろそうしてください。しかも短いし詰めが甘い。憎むべきものは未熟。

ありがとうございました（・ω・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4575q/>

Baby! Baby! Baby!

2011年10月6日22時54分発行